

関心

津守 真

新学年のはじめには、高い所に上ったり、流しのふち、トランポリンのへりなど不安定な所を歩き、私が近寄ってもほとんど関心を示さないようにみえた四歳のA子は、二か月たったいま、私のところに泣いて寄ってきたり、ふと気がつく私に後に立っていたりする。

きのうはシーソーの上に立ち、私の手につかまって何度もシーソーを揺らしてたのしんだ。壁際の、足の幅ほどの線の上を歩くのが好きなのだが、足を滑らせワッと泣いて部屋の中央に向かって走った。私が近寄って抱きかかえると私の膝に坐り、びったりと身を寄せて泣きやんだ。挫折して自分がどうしてよいか分からないとき、人に助けを求めらることをせずにはふらふらと歩きまわる子どもは、霧の中のように自分自身の喪失感を感じているのだろう。一瞬の後、この子どもは私に身を寄せて安定した自分に立ちもどった。いま、この子どもは私の存在に気付き、関心を寄せはじめています。

このような現在、四月のはじめ頃の人に対する無関心な状態をふり返ってみると、その頃もこの子どもは私に対して全く無関心というわけではなかったのだろうと思われる。裏庭の滑り台の上に立ってどこか遠くを眺めているとき、私が近くにいても私などいないかのように振舞っていたのだが、「あなたはこの小さなわたしなど本気に一緒にあそびでなくかくれないでしょ」と思っていたのではないかと私は察する。実際、四月ははじめ新しい子どもが何人もいて、他の子どもたちのことが気になり、このよそよそしい子どものところは長くとどまっていることはできなかった。ちょっと立ち寄っては、じきに私は他の子のところに立ち去った。こういうとき、私は担任として手落ちがないようにと気にしており、(それも必要なことなのだが、)ひとりひとりの子どもに人間的関心を向ける余裕がなかったのである。

数週間たった頃、私も自分のクラスの親子のことが次第にわかってきて、ひとりひとりの子どもと出会ったところでゆっくりと交わるゆとりができてきた。この四歳のA子と長い時間つきあったはじめは、五月半ばに裏庭の滑り台の上から他の子どもが水を流し、あたりを水だらけにしたときである。A子はその滑り台を下から登り、立ったままで斜面を走りおりようとした。私はいそいでA子を支えた。滑り台の下の水たまりでA子はしばらく遊ぶとまた同じことを何度もくり返した。水たまりがあるとA子はきつととんでゆくから、斜面の下にたまった水はA子にはとくべつ面白いらしい。滑り台を立ったまま走りお

りようとするのは、人に支えてもらいたいというA子の表現かもしれない。私は、斜面を走りおけるA子を何度も支えて過ごすこの時を、子どもにとって意味ある時と思い、長い間そこで一緒に過ごした。

こうして私がこの子に関心を寄せ、この子も私に関心を向けるようになってきた。関心を寄せるというのは、危険がないように傍に居るのは違う。自閉症児にはスキンシップが必要だから傍についているというような公式的理解の仕方とも違う。その子のしている行為がその子にとって意味があることを認めて傍に居ることである。この幼い子どもはその人間形成の原初的段階で、身体水準での自分自身を形成する過程を歩んでいる。その真剣な努力に対して、私は関心を寄せる。

はじめは好奇心や研究的興味から、ある子どもの奇妙な行動に関心をもち場合があることを否定はできないが、次第に子どもの側からの見方に関心を寄せることによって、子どもは、その人から自分が人間として関心をもちたれていると感じるようになるのではなからうか。

子どもが毎日を自分の人生として自信をもって歩むようにと、私共は子どもの行為のひとつひとつに人間的関心を寄せる。

先日、私はある幼稚園の公開保育に参加する機会があった。私はいくつかの部屋を回って三歳児の部屋にきたとき、丁度、降園の支度をしていた。片隅のたたみのコーナーで横

になっている男児にまわりの数人の子どもたちが「オキロー オキロー」とどなっている。見るとその男児は目をつぶり眠っているようにみえた。眠っているときに起こされたら可哀想と思い、「赤ちゃんねんねしているから」とふとんをかけてそっと叩いた。そうすると女の子が「あたし赤ちゃんじゃない、大きいお姉さんだもん」と抗議する。「大きいお兄さんをやさしく、ねんねんようとなかしてあげましょう」というと、大声を出していた子どもたちも少し穏やかになった。「ねていると夢をみるね」と私がいうと、子どもたちはケーキの夢、怪獣の夢など口々に話しはじめ、ひとしきり夢の話になった。もう大声でどなって起こすのではなく、夢をみているかもしれない眠っている子どもにもふとんをかけて、ねかしてあげようとする空気になっていた。間もなく、まわりの子どもたちは椅子に坐り、紙芝居を見にいった。

ふと気がつくと、眠っていた男の子が細く目を開いて私の身体にすり寄っている。その子は眠っていたのではなかったらしい。周囲に無関心を装い自分の世界を守っていたものと思われる。オキローと大声でいわれたとき、周囲から寄せられたその「関心」はこの子にとっては煩わしく思われたのだろう。この子は一層自分の殻に閉じこもった。自分の中に沈潜していたそのときの気持ちを察して、静かにねかしておいてあげようとの関心の向け方に対して、このこどもは自分の関心を返し、私の傍に寄り添った。それからその子は畳に落ちていた小さな紙片を、次々に私に手渡し、私の掌が一ぱいになると自分から立ち上って紙芝居を見に皆の輪の中に入っていた。帰り際にこの子どもは、私の掌から紙片

を取り、屑かごに捨ててこのできごとを自分から完結させた。あとできくと、この日は朝からこの子どもは参観者を気にして、保育室の片隅に自分の位置をきめていたとのことだった。人間に敏感なこの子は、一時的にはあるが、周囲に対して無関心を装って自分を守ろうとした。その子どもは片付けから降園への社会的適応への要求に対しては応答しなかったけれども、その子の世界への人間的関心に対しては心を開いたのであった。

子どもたちの中にとると、人に関心を向けるというのはどういふことを考えさせられる機会が多くある。最初に述べたA子のように、関心がないように見えながら、人に対して関心をもっている場合も少なくない。直接に話しかけたり誘いかけてたりしてくれないけれども、行為によってその関心は表現されている。A子の場合、流しのふち、トランポリンのヘリ、壁際の線など不安定なところや落ちそうな場所を選んで歩いた。大人の顔も見ずにひとりやっっているから、人に対して関心がないのかと思ってしまうが、日がたつにつれて次第に分かってきたように、人が関わってくれるようにと危なげなところを歩くのである。

それでは子どもの傍にいきさえずればいいのかというところではない。「危い」といっておろそうとするとその手を払いのけて拒否されたりする。社会に適応できるようにと期待とあせりをもって傍に居るとき、大人の顔に微笑があっても、子どもはそれを煩わしく感じるのではなからうか。関心をもつということは、子どもの外面的部分ではなく、子

ども自身が生きている生活、及びその意味に対する関心のことである。

もうひとりの幼稚園での子どもの場合、この子が周囲に対して敏感なことは、はじめの訪問者には分からなかった。私はこの子は本当に眠っていると思っていた。周囲の子どもの声はこの子にとっては他者からの温かい関心とはいえなかった。その子どもたちが帰る支度へと事態を進行させることなく、その子の世界を大切にすることへと関心を転じたときに、この子どもは周囲の社会を自分が生きる世界として受けとることが可能になった。

他者に関心をもつことは、愛することと言いかえてもよい。愛は、他者の行為の中に、

その人にとっての意味を見い出す知性と、惜しむことなくそれに応答する身体行為とを含む。それに対して、大人の側の一方的期待や要求からの関心は、愛を騒々しい干渉へと変えてしまう。

(愛育養護学校)

